

蝶園の庭——竹林とヒヤシンス——

高橋 博巳

1

田能村竹田（一七七七—一八三五）に『隠栖喫茶図』（図1、文政十年、一八二七、個人蔵）を描くよう依頼した当のモデル蝶園は、「満園の竹樹」に囲まれて「屏居六十年、茶を煎て自ら喫しむ」というように完璧な文人として描き留められている¹⁾。しかしその一方で、蝶園は通称を津川文作という長崎酒屋町の組頭としての顔も持っていた。竹田の画および賛だけ見ていては気付くべくもないが、蝶園は「隠栖」どころか長崎の行政の末端に連なって生きていたのである。

竹田が『隠栖喫茶図』を描いてから十数年後に蝶園のもとを訪れたのは、のちに北方探検で知られることになる松浦武四郎（一八一八—一八八八）だった。武四郎の『西海雑志』にはみずから、「名所・奇事とても西遊記、筑紫紀行、長崎見聞録、画譜西遊譚、其外諸書に出たるは除てするさぬもの多く、彼に疎なるは此書に密に記す」（「凡例」）というように、本書に就かなければ知ることのできない話題が多く含まれている。次に引く「蘭種異草」と題する文章もそうした貴重な記録である。

長崎酒屋町に津川氏、通称文作、蝶園と号する一崎人あり。其の性奇石異木を好み、室中にハ数多の奇石を置ならべ、庭前にハ種々の草木を植、自ら其中に逍遙して心を樂ましむ。余も長崎に二年

ばかり滞留の間は、常に行通ひ至て心易かりしが、園中四季ともに花の絶るひまなし。其中に蘭種の異艸数々ありて、ヒイマシントーといへる黄花の水仙などわけて見事に咲たり。

（『松浦武四郎紀行集』中巻、富山房、一九七五年）

江戸後期に「奇石異木」趣味の持ち主は珍しくない。しかし「四季」折々に目を楽しませてくれる花々のなかに「蘭種の異艸」が少なからず、「ヒイマシントー」を見事に咲かせていたとなれば話は別である（図2、『西海雑志』下、挿絵）。

『図説草木辞苑』（柏書房、一九八八年）によれば、ヒヤシンスは天保十三年に渡来したばかりで、武四郎は翌十四年には長崎を離れているから、蝶園の庭に咲いていたヒヤシンスは長崎に球根が届いてすぐに植えられたものということになる。また武四郎のスケッチにある「蘭種コロイチイルルノーニイ」は南アフリカ原産の「はなかたばみ」で、この植物は天保十一、二年に渡来したという（同上書）。これら竹林ならびにヒヤシンスを初めとする「蘭種の異艸」から知られるのは、蝶園が伝統的な文人趣味の持ち主だったうえに、オランダ渡りの植物にも並々ならぬ関心を持ってガーデニングを実践していたという意外な事実である。

ちなみにヒヤシンスは、十七世紀にチューリップが大流行したあと



図2 『西海雑誌』下、挿絵

をうけて、十八世紀になってからヨーロッパ中でもてはやされ、特にオランダではアドミラル・リーフケンという品種の球根一つが二万ドルで取引されたと伝えられている(湯浅浩史『花の履歴書』五五頁、講談社学術文庫)。また同書によれば、ヒヤシンスはフランス人造船技師サバチエによって幕末にもたらされ、流行したのは明治になってからという。とすれば天保年間に蝶園の庭に咲いていたヒヤシンスは、その先進性と希少性の双方において抜きんでていただろう。さすがに黒田斉清(一七九五—一八五一)の『珍品草木写真』巻一には、「黄花水仙 オランダスイセン 蛭語ヒヤシンド」という名前で彩色画が掲載されているが、これは筑前福岡藩主だからできた贅沢であろう(図3、京都府立植物園・大森文庫蔵)。

また園芸趣味ということでは、竹田も文化七年(一八一〇)『竹田莊詩話』に序して次のように述べていたことが想起される。

二、三年来、予旧業を廢輟して、花卉を愛植し、湯薬の外、凡百の心を費し、生を勞するの事、一も為さざるなり。是に於いて一日の内、二課を分修す。一は則ち詩を攻め、二は則ち花を理む。四時花卉、屋を繞りて雑茂し、晨夕園を涉り、籬間に逍遙すれば、色香繽紛として、衣袂に掩映す。

『田能村竹田全集』国書刊行会、一九二四年

竹田は藩儒の身でありながら儒者の仕事を放擲して、詩作とガーデニングのみを日課に、「四時花卉、屋を繞りて雑茂」するなか、「晨夕に園を涉り、籬間に逍遙」していたというのである。蝶園もまた、あたかも『莊子』齊物論篇の「胡蝶」のように、「自ら其中に逍遙して心を樂ま」せていたので、この二人は『園芸家12カ月』(小松太郎訳、中公文庫)の著者カレル・チャペック(Karel Čapek、一八九〇—

九三八)のはるかな先達といふことができるだろう。

2

しかし大の大人が日がな一日、詩作とガーデニングに耽り、あるいは「煎茶自娛」だけで過ごせるものだろうかという疑問は、働き蜂の現代人ばかりでなく、同時代の詩人菅茶山(一七四八〜一八二七)の随筆にもそのあたりの機微が次のように説かれているのは興味深い。

雅事の説 凡用事と雅事とかねざるは、真の雅事にあらず。障子の腰に絵をかきたるは、はめかふるとき、右よ左よとまよはず、又趣もありてよしといふ。この事、万事にわたるべし。

〔筆のすさび〕三、『新日本古典文学大系』99、岩波書店、二〇〇〇年)

茶山はさらに「但雅事のみにしてよきは、家を子弟に譲りて隠居せし人と僧とのみなり」と言い添えたあとに、「隠者といふものも、世わたりの業はなくてはかなはず」と述べている。隠者でさえかくのごとし。まして儒者や組頭においてをやである。

では蝶園が組頭として果たした仕事とは何か。その一端を何よりも雄弁に伝えているのは、天保十四年頃、武四郎に北方情報を伝えて蝦夷地行きの直接のきっかけを与えたことであろう。文作の手元には漂流民からの聞き取りの記録が二百余冊もあったという。それまでもっぱら唐・天竺に向いていた武四郎の関心を北方に転じさせたのは、文作が蓄積していた海外情報だった。

いま、その情報がどのようなものだったか明らかでないが、一般論としてならばハンガリー生まれの冒険家「ハンペンゴロ」こと、ベニョフスキー(M.A.A.Benyovzky, 一七四六〜一八六)によってもたらさ

れたロシア南下説によって、工藤平助(一七三四〜一八〇〇)の『赤蝦夷風説考』(天明三年、一七八三、田沼意次に献上)を初めとして、林子平(一七三八〜九三)の『三国通覧図説』(天明六年刊)や『海国兵談』(天明六年脱稿、寛政三年刊)など、その種の問題には事欠かなかったはずである。『三国通覧図説』はちなみに、シベリアのイルクーツクに伝えられ、さらにその地の日本語学校に赴任していたドイツの東洋学者クラプロート(H.J.Klaproth, 一七八三〜一八三五)の手でフランス語に翻訳されて、一八三二年(天保三)にはパリで出版されてもいたように、情報は東西を行き交っていたのである。クラプロートは一八〇五年に大黒屋光太夫一行中の新蔵について日本語を研究し、一八一六年よりパリ大学教授だった。

そればかりでなく、恋川春町(一七四四〜八九)は黄表紙『悦最良蝦夷押領』(天明八年序刊)でその前年の幕府による蝦夷地探検を戯画化して評判になっていたということもある(図4、北尾政美画)。



図4 北尾政美画

作者、恋川春町は本名を倉橋格という駿河小島藩の侍だったから（ペンネームの恋川は、藩の上屋敷のあった小石川にちなむ）、その筋の情報には触れる機会もあったろう。作中には、司馬団観（松前藩主、志摩守道広）や奥蝦夷のインツウフツエスしうれん女王（エカテリーナ二世か）らが登場する。このように江湖の話題に上ってはいたが、そういう間接的な知識とは異なる、生の切実な情報を武四郎は文作のもとで入手したのであろう。その際、その情報を文作がいかに解説して伝えたかも重要だったろう。^③

こうして弘化二年（一八四五）に始まる蝦夷地探検を経て、武四郎は安政二年（一八五五）一旦幕府の蝦夷地御用掛になるものの、四年後には辞職している。また明治二年（一八六九）には開拓大主典、のちに開拓使判官に任用されて「北海道」や「樺太」などの名付け親になったが、こんどもまた新政府のアイヌ政策に反対して翌年辞任している。爾来、明治二十一年に七十一歳で没するまで、市井にあって遊説と著述の日々を送ったことは周知のとおりである。^④

3

蝦夷地における活動のなかで小論の文脈から注目されるのは、『鴨屋頼先生一日百詩』（元治元年、一八六四、刊）にまつわる逸事、ならびに『蝦夷漫画』（安政六年、一八五九、刊）の描写についてである。

前者は江刺の斉藤鷗洲の雲石楼に滞在中、そこで出会った鴨屋頼三樹三郎（一八二五〜五九）とともに、武四郎が詩題を篆刻する間に鴨屋は詩を賦して一日に百印百詩を制作したのを、のちに非業の死を遂げた鴨屋の「詩と書」を不朽に伝えるべく、鴨屋の書体のまま印刷したものである。巻頭に武四郎の手になる〈江刺切石坂眺望之図〉（図5）を掲げ、本文冒頭には「伊勢 松浦竹四郎源弘上梓」と記され、

同じく武四郎の手になる「一日百詩跋」には次のように記されている。

詩を論じ文を談ずるの余、伯交戯れに眼前即事の語を拾いて題を命ず。予、為に拙刀を奏して、之れを篆す。子春、乃ち健筆を弄して、之れを詠ず。随いて刻せば随いて吟ず。筆飛び、刀舞い、^{あき}昕より晡に至りて、百印百詩、咄嗟にして成る。一時の遊戲三昧に出づると雖も、然れども亦た芸林の韻事なり。（中略）予曰く、嘻あ、英発の氣、精華の筆、刻燭擊鉢の才、以て後進を鼓動するに、則ち子春の詩と書と、并せて不朽に伝う可し。惟だ予の拙篆は、笑いを後人に貽すを恐る。伝えずして可なり。子春、方に疥癬を患う。而して筆力適逸、常日に異ならず。豪爽の氣、病みて衰えざること、此くの如し。亦た以て其の平素養う所の者を觀るに足るなり。

「伯交」は鷗洲の、「子春」は鴨屋の字である。「拙篆」は「伝えずして可なり」として省略したのは、武四郎に自己顕示の意思のないことを示している。馬場先門南の住まいに

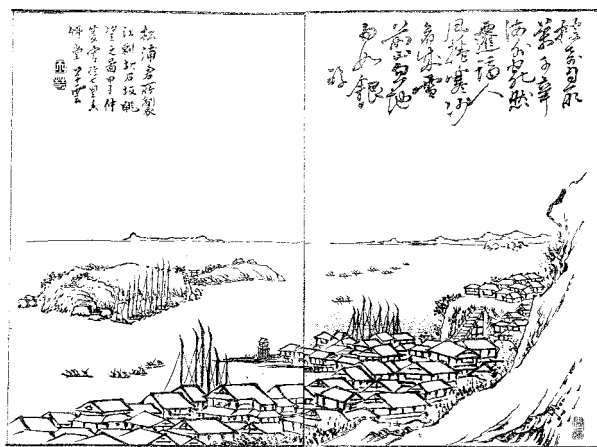


図5 江刺切石坂眺望之図



図6 馬角斎蔵

ちなんで「馬角斎藏」(図6)という蔵書印を用いたユーモアとともに、忘れがたい逸事といえるだろう。その後、武四郎の子孫の手によって武四郎の篆刻ともども再版されたものが、近年江刺市の関係者によって解説付きで翻刻され、いまでは容易に武四郎の篆刻を見ることができようになった(図7)。⁵⁾ たとえば、百詩のうちの三十二番目は「小自在」と題され、次のように詠まれている。

文章成一気 文章 一気に成り
揮筆酩酊中 揮筆 酩酊の中
本非悦人物 本より人を悦ばす物に非ず
無意拙将工 拙と工とに意無し

このいかにも豪快な揮毫振りに父山陽の面影が彷彿とするのみならず、山陽を介して「小」や「拙」を標榜していた竹田の面影までも仄見えるようだ。陰陽二刻を掲げるために、五十三番目の詩を続いて引用しよう。題は「人間俗気一点无」人間、俗気一点無し。

環戸栽修竹 戸を環りて修竹を栽えれば
清風戛々来 清風 戛々として来たる
不識窮通事 識らず 窮通の事
人生有酒杯 人生 酒杯有り

「修竹」は長くのびた竹。「戛々」は固い物が当たる音の形容。「窮通」は困窮と栄達。こうしてわずかに二例を見ただけでも、両者の文雅が偲ばれて頬笑ましい。

さて後者『蝦夷漫画』の「弾弓式」(図8、『松浦武四郎紀行集』下)は、一見して蠣崎波響(一七六四〜一八二六)が描いた『夷酋列像』

の模写と知られる。しかし、武四郎の画には「アツケシ首長エコトイ」と題されているが、これは衣服の色こそちがえ、波響描くところのシモチの像(図9)を写したものである。とまれ、武四郎の立場からすれば、松前藩家老の波響は対立図式の正反対側に属する人物である。だがこの模写を見るかぎり、そのような気配は感じられず、意外にも武四郎は文人波響のアイヌの人々への共感を鋭く察知していたのかもしれない。⁶⁾



図9 イコトイの像→
シモチの像↓



図8 『松浦武四郎紀行集』下

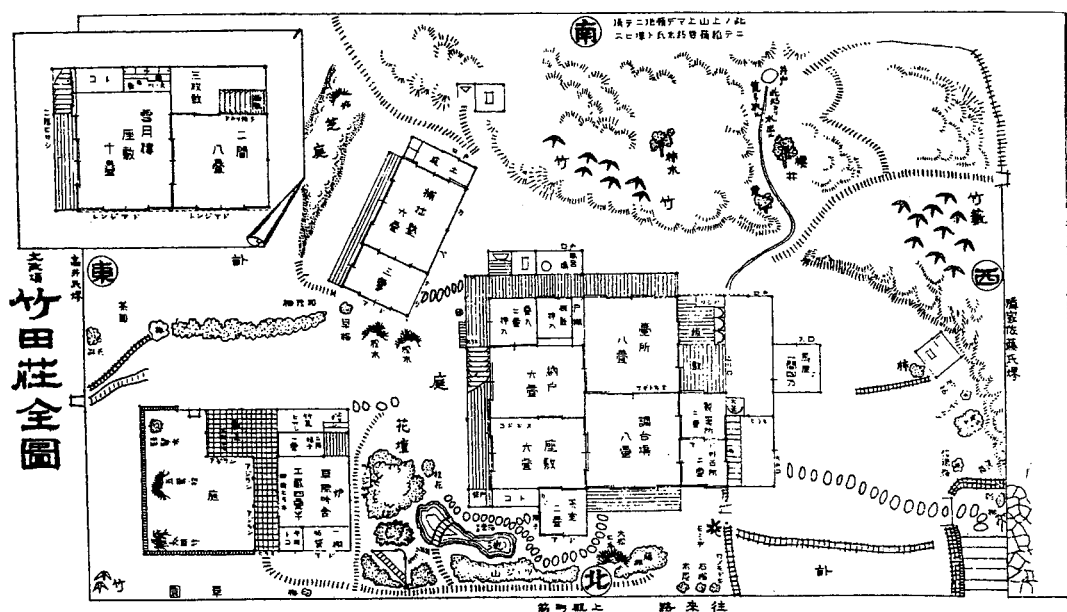


図10

4

武四郎の逸事でもう一つ忘れることができないのは、晩年に作られ
今もICU構内に保存されている一畳敷きの書斎である。この付随小
建築に、私は竹田荘の二畳の茶室兼書斎の面影を見る。武四郎は九州
旅行の途次、竹田荘を訪ねていた。惜しくもそれが竹田没後だったた
めに両者が相見えることはなかったが、竹田荘の佇まいは長く武四郎
の記憶に残ったにちがいない。竹田荘を訪れて門をくぐり母屋に近づ
いてまず目を引くのは、北面に張り出したわずか二畳の小さな茶室兼
書斎である。「小」を標榜した竹田に相応しい空間として印象に残る
のである(図10)。

サイズをさらに極限の一畳敷きに縮めた武四郎の新たな工夫は、材
料を全国の著名建築物からのモザイクで構成するという奇抜なアイデ
アだった。事の次第は『木片勧進』(明治二十年、一八八七、刊)に
逐一記述があり、たとえば「南都興福寺書院板」を「北小窓の左右の
わくに用ゆ」といい、「城州嵐山下渡月橋々桁松材」を「柱ろ一に用
ゆ」というような具合である(図11)。そして同書末尾の「壁書」に
は次のように記されている。

我若きより一ツの行李を肩にし、六十余州蝦夷樺太まで踏偏し、
後当地に來住する事殆ど四十年、終にこの神田五軒町を一區の死
陀林として住めり。今度こゝに一間を建添へ、纔に畳一枚を敷く。
是敢て物好するにハあらず。もとよりある畳十八枚半に是を合て
十九枚半となる。是二十枚に満るをかくの心なり。良田万頃食二
升、大廈千間臥八尺(清献公坐右銘)、寄居虫の小さきこそ心安
けれと自ら安んじ、古き歌に、常磐なす岩屋は今も有けれど住け
る人ぞ常なかりける(万葉)の箴を忘ることなかるべし。
今度この古材、板きれ等、諸国の友より贈り呉られしを以て補理

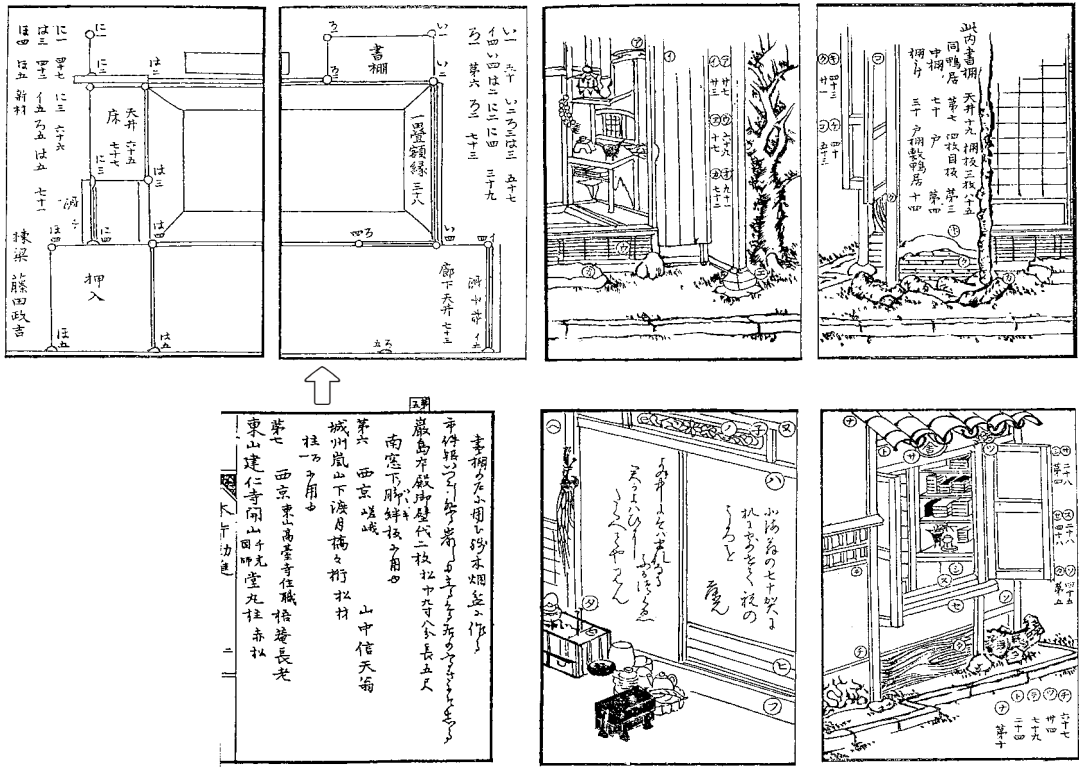


図11

たり。是また其友を朝夕に是は誰より、かれは誰よりと其人々を思ひ出る種にして、其友の厚き志を忘れず、其人々の言行ひ目出度きことを人々にも語らまほしき心はかりにて、敢て後二まで伝はれとて作りなせるにはあらずと。是やミしむかし住けん跡ならん蓬が露に月のかゝれる、と西行上人のいはれしをもおもひてなり。(後略)

こうして武四郎は明治十九年の歳末、「壁書」を記し終えて、

世の中につり合ぬ身ぞやすからん暮行年のいとなみもなく

という一首を末尾に書き添えている。これはまさに竹田の文政三年八月八日付け、広江秋水宛て書簡に、「今年元日之朝」の作として、

今朝はとておきて営む業もなし春をば花と鳥にまかせて

というのと同じ考えといつてよい。それぞれ歳末と年頭の「いとなみ」を問題にしているが、自由の境涯を楽しんでいる点では一致している。しかし武四郎の場合もはたして「世の中につり合ぬ身」で満足していたかどうか。

ところで、さきの「清献公」は宋の名臣、趙抃ちやうべんの諡。高位者に対しても恐れずに弾劾して鉄面御史と呼ばれ、たとえば王安石(一〇二一

八六)とも対立した人物として知られている。「良田万頃…」とは、いくら広い良田があっても、一人の人間が食べるのはせいぜい二升であり、大きな邸宅に住んでいても眠るときにはわずか八尺の広さがあれば十分だという、足るを知る考え方が説かれている。「常磐なす」の歌は、『万葉集』巻三に収められている博通法師の、紀伊国に往き

三穂の岩屋を見て作った三首のうちの第二。岩屋は変わらずにあるものの、住人はそういうわけにはいかず、無常の定めを免れることはできなかったという意。十九畳半の畳が「二十枚に満るをかくの心」に依っているというのは、何に基づくものか未詳。

5

このほかにも武四郎については、藤田東湖（一八〇六～五五）や吉田松陰（一八三〇～五九）ら幕末思想家との幅広い交友、幕府および明治政府への出処進退の潔さなどについて語るべき点が少なくないが、これらはすでに周知の事柄に属する。アイヌの人々への共感あふれる眼差しを支えた高い志と、長年の日本全域に及ぶ旅を可能にした不屈の精神こそはこの人の存在を特別のものにしているが、それとともに局面の端々に認められる文人性にいまは注目したい。そこに長崎で出会った文作＝蝶園の生き方、さらには竹田の影響までが看取されるように思われるからである。長崎滞在時には蝶園のもとを度々訪れていたから、竹田が描いた《隠棲喫茶図》を目にする機会もあったろう。とすれば「煎茶自娛」の高雅な精神性をそこに見たにちがいない。全人的な影響はその生き方に現れていたはずであるが、そればかりでなく、竹田荘と蝶園の簡素な住まいに、後年の武四郎の一畳敷きの書斎が呼応しているとすれば、竹田＝蝶園（文作）＝武四郎の連鎖は、文人精神が江戸から明治へと時代を越えて伝えられたかけがえのない証左となる。

6

ここでもう一人、小論の補足として、竹田の『自画題語』前編に次のようなかたちで登場する仙胤という人物にも触れておきたい。

梅雀巻

客歳、崎に入るの三日、客有り、突然来訪し、袖より一獅炉を出して曰く、「仙胤子、余に托して転贈せしむ」と。余、之れを聞いて、意頗る焉れを異とす。其の人を識るに及べば、果たして崎人なり。平居善く病み、清羸肉無き者の如くして、神思奇巧、百技妙に造る。清人傳士然、授くるに月琴の譜、及び煎茶の訣を以てす。其の家、酒屋街の側に住し、小簾の間、茶煙霏霏として、絃索嘈嘈たり。夜以て日に続き、間断有ること無し。戸外を過ぐる者、之れを望めば、韻人逸士の居る所と知るなり。予、將に東帰せんとして、此の巻を作り別と為し、数語を書して跋に代う。画筆の工拙に至っては、子固より善鑑、一目了然として、喋喋するを俟たざるなり。丁亥、重陽後四日。

（『日本絵画論大成』9、ぺりかん社、年）

長崎に到着したばかりの竹田のもとに、人を介して「一獅炉」を届けさせた人物が仙胤である。一体どんな人だろうと思っていたら、やはり「崎人」だった。しかも病気がちで鶴のように痩せてはいたが、諸芸往くとして可ならざるはなく、「百技妙に造る」人でもあった。さればこそ「清人・傳士然」より『月琴譜』ならびに『煎茶訣』の二冊を授けられもしたのだろう。「酒屋街の側」に住んでいたというから、文作の住まいにも近かったはずである。「小簾」小さなすだれのあいだから「茶の煙」とともに「絃索」が絶えることなく、そばを通りかかるとただちに「韻人逸士の居る所」と知られたという。「絃索」は弦楽器の総称であるが、仙胤の場合は『瓊華競秀』に二胡を弾いている姿が写されているので（図12、都立中央図書館加賀文庫蔵）、家でもそうした楽器を楽しんでいたのであろう。「百技妙に造る」の例としては、天保三、四年頃の竹田の宛名不詳の書簡の一節に、「扱、



図12

仙胤兄二、香炉のなほし頼置候。早々御取、御遣可被下候」と見え、これが先に見た「一獅炉」であるかどうかはともかくも、手先の器用な人だったようだ。

また傅士然より贈られた『煎茶訣』が、のちに竹田の手によって復刻されたさいに、次のような文章が付されている。

本邦、茶飲の行わるるや久し。近日、用うる所の葉茶、僧隠元の将来と相伝う。未だ果たして然るや否やを知らず。其の風炉・急尾焼を用い、烹点・飲啜に至りては、游外高翁より始まる。丁亥の年、崎山に寓し、清人の茶を煮るを見る。湯瓶・茶注、相須い

て用を為すこと、『茶疏』に論ずる所の如し。斯の譜に載する所も亦た同じ。予迺ち専ら此の法に従うと云う。

『茶疏』は同書で竹田もいうように、許次紆の著述で、明代の茶のあり方を伝える好著として評価が高い。

傅士然、福州の人、老いて子無し。子然^{けつぜん}孤立、来たりて蘇州に寓し、数しば商舶に従い、崎山に往来す。茶を好み、仙胤と善し。乃ち是の書を伝う。沈綺川、予が為に云う、福州は宋の建州、北苑在り。故に茶飲今に至るも仍お盛を為すなり。

斯の書、原本五冊、士然、其の二冊を抜き、仙胤に分贈す。胤、再び一冊を以て予に転贈す。新冊、即ち是れなり。士然、書して云う有り、茶経沓部、古瓢式個を贈り奉ると。其の実、二冊に過ぎず。全部に非ざるなり。

「子然」は孤立している様子。「北苑」は福建省の茶の産地として著名。これによって、ともかくも傅士然より仙胤が贈られた茶書をさらに竹田が一冊を贈られて『石山斎茶具図譜』として版に起こしたものと知られる。なお、これは末尾の日付、「己丑、猶清和月二十九日」すなわち文政十二年（一八二九）四月に「播の十八洋」の舟中で執筆されたものである。

こうして煎茶や楽器の演奏を楽しむ、画の鑑賞眼も持ち合わせていたとすれば、これまた文人趣味の人であったが、仙胤の場合も他にもう一つ別の顔があった。それは天保六年に刊行された『清朝一統之図』（図13）という一枚刷りの世界地図に監修者として名が載ることである。この地図の上段右端には「兼葭堂録」として「大清前帝御製」が掲げられている。解説に続いて、上段左端には、日本天保六年の年紀

のあとに、「大清道光十五乙未歲、呉門陳松亭の図を以て之れを写す」という記載がある。その下段の「浪華青苔園誌、長崎仙胤校」と二行書きの後者が、すなわち当の仙胤である。

この地図自体は、たとえば左下段に描かれた群島の説明部分(図14)に、

惣名阿蘭陀、此七ヶ国ハ西天竺西北ニアタル。南天竺婆天ヨリ九千里、日本ヨリ一万二千九百り。



図14

なおまた竹田の《四季花卉図屏風》には、陳松亭が着賛している。竹田も、

出門一笑

己卯孟冬、松亭主人の為にす。老布衣憲

と書き入れているから双方に交流のあったことが知られる。「己卯孟冬」は文政二年十月である。

7

こうして長崎一年間の滞在中に出会った人々に贈った画賛を集めて出版した『自画題語』に、仙胤は入り、蝶園は抜け落ちていたのは何故だろうか？ 数が膨大であれば、たまたま忘れられたということもあるだろう。しかしわずかに二十篇余りの作品を忘れるとは考えにくい。卒然と『自画題語』を読んで誰しも気付くのは、最後に置かれた《着色瓜蔬図》に、

絵事は小技なり。瓜蔬は薇物なり。然れども毎毎、喜んで之れを作る。亦た吾が性の適する所なり。

とわざわざ「絵事」の「小技」であることを言い立てたばかりでなく、重ねて「憲や志は小に在りて、大に在らず」と繰り返している点である。これは「大」なる政治や経済には関心がないという姿勢の表明に外ならない。長崎で交友のあった村尾万載や木下逸雲、水野媚川らはみな組頭や町乙名だった。しかし『自画題語』では彼らの実際の仕事は一切触れられていない。たしかに風雅の領域に実務が入り込んではいかにも無粋である。

だが、こうして武四郎の眼をとおして見ることによって、崎人蝶園のイメージが格段に豊かになったことも確かである。そのために「十日門を杜じて唯だ静を愛するも、人に背いて敢えて孤高作すには非ざ

るなり」と詠まれた蝶園の生き方がくつきりと浮かび上がってもきた。ここでかつて田本政宏氏が「田能村竹田の海外情報入手」(『近世日本の海外情報』岩田書店、一九九七年)を論じられたときの読後感を思い起こせば、長崎での竹田の日常は『自画題語』にその半分しか跡を留めていないばかりでなく、残る半面をカムフラージュするような働きさえ果たしていたのではなからうか。機密事項に属する海外情報への接触は「小」への必要なまでの拘りという担保を必要としたのであろう。

〔後記〕小論は、その骨子をまず二〇〇六年五月二十日の金城学院大学国文学会同窓会での講演、ついで七月九日の名古屋近代思想研究会で発表し、その後さらに若干の補訂を施したものである。本文中に紹介した江差町版『百印百詩を読む』は、頼山陽遺跡記念館の花本哲志氏の御示教によって存在を知り、江差町の石橋藤雄氏の手を煩わせて送っていただいた。また江戸時代のヒヤシンス受容に関しては、京都府立植物園の小川久雄氏の懇切な御教示を得た。氏によれば武四郎がスケッチしたヒーマシントーは水仙と変わらないうである。七月の研究会では、エコール・ブラティック・オート・ゼチュール助教授で、フランス国立極東学院・京都支部長のフランソワ・ラシヨール氏(Francois Lachaud)から拙著『画家の旅、詩人の夢』(ぺりかん社、二〇〇五年)のみならず、これまでの文人研究にさかのぼって懇切なコメントを得たうえに、海外の研究事情についても裨益された。たとえばいま、私の机上に『The Travels and Adventures of Serendipity』(Princeton U.P. 2004)ほかの洋書があるのはその影響である。ラシヨール氏を紹介していただいた富永茂樹先生は、駕を枉げて研究会にも出席され、またこの日はライブニッツ研究者のフォヴェルグ・クレールさん(Claire Fauvergue)の顔も見え、十八世紀研究にふさわしく国際色ゆたかな会となった。

小論起稿のきっかけが、『隠栖喫茶図』周辺調査の結めの甘さに起因する

とはいえ、上記同窓会と研究会で発表の機会を与えていただいたお陰で、比較的短時日のうちに書き上げることができた。関係各位にこの場を借りて深甚の謝意を表する。

なお、七月の研究会は実質的には「啓蒙と東アジア…相互性のプリズムを通じた18世紀学構築」研究会(二〇〇六年度基盤研究(B))の第一回目と位置づけられるが、小論は同時に金城学院大学特別研究助成による研究成果の一部でもあることを謝意とともに記しておきたい。

注

- (1) 『隠栖喫茶図』については最初『国華』一二九一号(朝日新聞社、二〇〇三年)に執筆した解説を拙著『画家の旅、詩人の夢』に収録したさい、多少の補訂をほどこしたが、それでも直し切れずに残った問題が今回の補訂につながった。
- (2) 「蘭種異草」には江芸閣の詩が紹介されており、そこには、「自ら蝶園と号し、莊老を学ぶ」の一句がある。
- (3) ドナルド・キーン『日本人の西洋発見』(芳賀徹訳、中央公論社、一九六八年)および『赤蝦夷風説考』(井上隆明解説、教育社新書、一九七九年)参照。
- (4) 松浦武四郎の事績については吉田武三『松浦武四郎』(吉川弘文館人物叢書、一九六七年)ほかを参照。
- (5) 『鴨庄頼先生一日百詩』(東北大学附属図書館・狩野文庫蔵)ならびに『百印百詩を読む』(江差町同編集委員会、二〇〇〇年)参照。
- (6) 拙著『画家の旅、詩人の夢』第七章を参照。
- (7) 『松浦武四郎紀行集』、およびヘンリー・スミス『泰山荘 松浦武四郎の一疊敷きの世界』国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、一九九三年)に詳細を極めた叙述がある。また、山口昌男『知の自由人たち』第七章をも参照(NHKライブラリー、一九九八年)。